

## 第 6 部会

### 2001年度の強調点

小・中・高は「学習指導要領」の改訂に合わせて、各学校のカリキュラム改編に追われた。これは単に英語科だけの問題ではなく全学科の理解と私学としての聖学院小・中・高の姿勢とも深い関係をもつものである。特色のあるカリキュラムが編成された。幼稚園ではティームティーチングを基礎にした教育実践とカリキュラムの作成に努力してきた。大学は6年ぶりに40項目に及ぶ<ニーズアナリシス>を1・2年次生を対象に行い1,054名から有意味の回答を得た。

### 1. セッション I で討議された内容

セッション では、聖学院幼稚園、聖学院小学校、女子聖学院中・高校、聖学院中・高校、聖学院大学における英語教育の現状、カリキュラムの説明、ニーズアナリシス(大学)の報告をした。質疑応答は予定していたが当日時間が短縮されたためにセッション では断念しなければならなかった。

聖学院幼稚園(報告者:木村典子教諭)

ビデオを使って幼稚園における英語教育の状況が紹介された。

<たのしいえいご>のために、園の年間行事等も取り込んだ英語教育カリキュラムを作成したい。また、小学校との連携も考えたい。

聖学院小学校(報告者:角田芳子教頭)

1999年度に英語教育カリキュラム委員会を組織した。その後具体化してきたことは以下の通りである。

- 1) 高学年に簡単なライティングをとりいれることにした。
- 2) 2002年度から6年生を対象に英語の5段階評価をして家庭に知らせることにした。
- 3) 低学年では児童英検を、高学年には実用英検の受検を奨励している。

課題と展望

- 1) 幼稚園、中学との連携
- 2) 5、6年生の授業の工夫(クラス人数、担当者 ネイティブ教師と日本人教師)

女子聖学院中学校・高等学校(報告者:村瀬聰子教諭)

中1から高3までの<新カリキュラム>の説明。

生徒の習熟度を基礎とするクラス編成、外国人教師と日本人教師の役割分担、オーラルコミュニケーションへの配慮等をした。

高校2年は10単位まで、高校3年は13単位まで履修可能のカリキュラムとした。使用テキスト、テキストと成績評価、活発な校外活動(とくにNHKスキットコンテスト10年連続優秀賞[うち最優秀賞3回])等

- 課題 1) 教員組織、とくに専任教員の充実(着々と実行されつつある)  
2) 小学校との連携

聖学院中学校・高等学校(報告者:磯貝創一・林剛教諭)

A 4 - 12 ページの資料配布

- 1) 英語指導計画及び目標
- 2) 2002 年度年間指導計画案
- 3) 高校 1~3 年授業進度表
- 4) “Guide Dogs”, “Sh! Sh! Baby’s sleeping!” の授業状況をカセット録音にて紹介(臨場感があった)
- 5) 英語 Phonics

聖学院大学(報告者: E.D. オズバーン総合研究所助教授、山本昂教授)

大学では 2001 年 10 月上旬に英語その他に関するニーズアナリシス(学生意識調査)を行った。顕著で喜ばしいデータも得られた。

「聖学院大学での英語の授業に満足していますか」の回答 [ ]は 1995 年 3 月

- |              |               |         |
|--------------|---------------|---------|
| A) とても満足している | 48 名 (4.6%)   | [1.5%]  |
| B) 満足している    | 237 名 (22.5%) | [10.0%] |
| C) ふつう       | 616 名 (58.4%) | [40.1%] |
| D) 満足していない   | 140 名 (13.3%) | [47.2%] |

前回(1995 年)に比べて、A), B), C) の比率が増え、D) が激減した。

- 1) 週単位での、学生の学習時間の少なさ
- 2) いわゆる<英語嫌い>になるのは、中学生の時期において最も多い
- 3) 英語学習の目的意識が明確ではない学生が多い
- 4) コミュニケーションを中心とする授業を好む傾向が強い
- 5) 「英語は好き」という学生が予期したより多い
 

“I love it.”	106 名 (10.1%)	}(37.0%)	}(71.0%)
“I like it.”	283 名 (26.9%)		
“It’s OK.”	358 名 (34.0%)		
“I don’t like it very much.”	194 名 (18.4%)		}(28.1%)
“I hate it.”	102 名 (9.7%)		

## 2. セッションⅡで討議された内容 (A, B, C は分科会のグループ名)

- 現状
- 1) 女子聖中・高のスキット実践はずばらしい(A)。
  - 2) 女子聖高では留学して習得した単位を 30 単位まで認めている。聖大も留学中の単位をもっと認めたい(A)。
  - 3) 各学校の教員の間で英語一貫教育にたいする温度差がある(C)。
  - 4) 中・高では英検をセカンドベストとして導入している(B)。[参考(各種テストの日本での年間受験者数): 英検 300 万人、TOEIC 100 万人、TOIFL 10 万人]

- 課題と展望
- 1) 小学英語で<英語嫌い>をつくらないこと(A)。
  - 2) みどり幼稚園での英語教育の可能性を探る(B)。
  - 3) 各学校の新カリキュラムを踏まえて、聖学院英語一貫教育カリキ

- コラム作成を検討する時期に来ている(C)。
- 4) 学院内共通の行事として英語スピーチコンテストを実施しては？  
(B)
  - 5) 生徒の英語力の格差はさらに拡大していくことが予測されるので小中 高の連携の強化とその現実への対応(特別クラス編成等)が必要となる。コストはかかっても聖学院の特色・サービスとして取り組むことが望まれる(B)。
  - 6) 「コミュニケーションを中心とする英語教育の実践」に力点をおくべきことが参加者の共通理解となり、その上に具体的な協議がなされた(C)。

### 3. 今後の課題、継続討議について

2000年度の<顔合わせ的>な会議から、2001年度は<内容の理解と問題の共有>をする会議へと、一気に前進することができた。( \_\_\_\_\_ 部分) それには、部会委員会の積み重ねや英語教育をめぐる各種情報の交換等も貢献したと判断される。

期せずして各学校から<連携の必要性>が発言されたのは、2001年度英語教育部の大きな特色で、それは同時に、将来へ向けてのかなりの英知と困難と犠牲と努力・協力を求められることの自覚でもある。ある分科会で、「英語教育 国際理解(違いを知る) やさしいところ 人間としての生き方の決定」という方程式を語った方があった。聖学院教育の本質にふれた発言だと思う。

重い、いくつもの課題があるということは、それだけ大きい希望があるということでもある。教育会議3年目に入るにあたり、それぞれの肢(園・学校)が刺激を発生し、受け、励まされつつ、肢独自の問題と、全体の問題に取り組む1年有余であることを期待する。希望(VISION)は広がるばかりである。

以上

(報告者：山本 昂)